

ぼくが バナナだったら

もし ぼくが バナナだったら  
きっと あの まっきいろで 太<sup>ちよ</sup>ちよのだ。

もし ぼくが 山<sup>やま</sup>だったら  
きっと あの山<sup>やま</sup>だ。  
蟻<sup>あま</sup>が つもっていて 蟻<sup>あま</sup>に かくれているけれど  
もうすぐ ぼくはつしそうな火山<sup>かざん</sup>。  
もちろん、山の てっぺんを ふきとぼしたり  
だれかを きずつけたりなんか しないよ。

もし ぼくが 鳥<sup>とり</sup>だったら  
きっと 大きな つばさをもった  
首<sup>くび</sup>の 長い 大きな 鳥<sup>とり</sup>だ。  
そして 王<sup>おう</sup>さまみたいに ひとりで いろんなところを とんでいるから  
みんなは ぼくを とおくからしか みたことが ないんだ。

もし ぼくが 牛<sup>うし</sup>だったら  
きっと あそこの 牛<sup>うし</sup>だろうな。  
ほら、しばふの 上<sup>うへ</sup>に どうどうと 立<sup>た</sup>っている あの ぐろい 牛<sup>うし</sup>さ。  
あれほど りっぱな 牛<sup>うし</sup>は いないだろ？

もし ぼくが 蟻<sup>あま</sup>だったら  
きっと まっくろで 大きな 蟻<sup>あま</sup>だ。  
ぴかっと かみなりを おとして  
ザーっと 雨<sup>あめ</sup>を ふらせる蟻<sup>あま</sup>。  
だから どんなところも あらしに しちゃうんだ  
でも、たぶん もっと 小<sup>こ</sup>さくて  
もっと かるくて ふわふわしている  
そんな 蟻<sup>あま</sup>のほうが いいような きがする。

もし ぼくが てんとうむしだったら  
どんな きもちだろう。  
ぼくだけが ちっぽけにおもえて

ちょっと こわいかも しれない。  
でも、ひよっとすると  
とつても ゆうかんで かしこい  
まっかな てんとうむしかもしれない。  
じゆうに たかく たかく とびまわるんだ。

もし ぼくが さかなだったら...  
あんまり ぼくは さかなが すきじゃないから  
さかなには なりたくない。  
くじらだったら まだ いいかも しれない。  
すこしなら がまんできる。

もし ぼくが ぞうだったら  
鼻を どこに おくか きをつけなくちゃ。  
きみは きつと なれているんだろうな。  
ぞうに なるなら アフリカで じゆうに 生きる  
犬きくて つよい ぞうになりたい。

もし ぼくが スプーンだったら  
きつと これだろうな。  
いろが かわってしまっているけれど、  
ながいあいだ たいせつに つかわれている  
かたちの きれいな ぎんの スプーン。  
こんなことを おもうなんて へんてこりんだけど、  
ぼくが スプーンだったら こんなかんじだと おもう。

もし ぼくが 星だったら  
きつと あの 小さい 星だろうな。  
花の莖で かがやいている、  
ほかの星とは ちょっと ちがう星。

もし ぼくが 木だったら  
すごく うれしい。  
どんなに ぼくが おじいさんに なったとしても  
木だったら いちばん いいと おもうんだ。

もし ぼくが まっしろな ねこだったら  
つんと すまして ほかのひとには なつかないんだ。  
でも きみだけには ゴロゴロと のどを ならして  
みんなを びっくりさせるんだ。

もし ぼくが ライオンだったら  
きっと あそこで 友だちと すわっている あの ライオンだ。  
じっと なにかを かんがえこんでいるんだ。  
でも...

もし ぼくが ライオンだったら  
ひとりぼっちに なっちゃうかもしれない。  
だから ライオンには なりたくないな。

もし ぼくが 小さい おとこのこだったら  
それとも 大きい おとこのこだったら  
うーん

・・・そんなに 大きくなって  
でも そんなに 小さいくない おとこのこだったら...  
ぼくは いろいろな おとこのこを おもいうかべてみたけれど、  
やっぱり  
ぼくは

**ぼく**だ。